



はくく

育みの海

ひがしはず
東幡豆今昔紀行

See What Sea Nurtures:

The Past and Present Stories

in Higashihazu



はぐく
育みの海

ひがしはづ
東幡豆今昔紀行

*See What Sea Nurtures:
The Past and Present Stories
in Higashihazu*



李 銀 姫 編

本間 咲 来 ・ 木 村 文 子 編 集 協 力

Edited by Yinji LI / In collaboration with Saki HONMA & Ayako KIMURA



表紙写真：福田千年 氏

愛知県西尾市の東部に位置する東幡豆は、2015年現在、人口4,840人、1,492世帯の小さな町であり、古くから三河湾の恩恵をたっぷり受けてきた海辺の町である。海岸から600mほど離れたところには前島と呼ばれる無人島があり、その島と海岸の間にはトンボロ干潟と呼ばれ親しまれている干潟（p.57参照）が広がっている。アサリやマテガイをはじめとする様々な生き物が棲息しているこの場所は、昔から愛知県内有数の潮干狩り場を誇ってきた。

今でも豊かな自然の恩恵を受け続けている東幡豆では、現在、トンボロ干潟という地域資源が生かされ、「環境教育」をキーワードとした地域再生の努力が図られており、環境学習だけで、年間約500人の地元及び地元外の子どもが訪れている。このような地域における人々の「努力」、その人々を育ててきた海・自然の「魅力」、そしてそれらによって創造される地域の「活力」、地域の昔と今とこれからの「力（ちから）」を広く発信したいというところに、本書のねらいがある。

本書は、「産業」「観光」「暮らし」「未来」といった多様なものを内包してきた東幡豆の海を通じて、この地域の昔から今にいたる様々な営みを、写真を通して素描している。ここで用いられた一つ一つの写真は、地元の方たちからいただいた貴重なものであり、写真の解説は地元の方たちへの聞き取り調査とその他の参考資料に基づくものである。内容の構成にあたっては、東幡豆を知らない人にも魅力が伝わるように、楽しく、親しみやすく読めるものを心がけた。実際に私たちは東幡豆を何度か訪れ、魅了されている。この地域の良さをたくさんの方に知ってもらいたいと、素直に思う。

近年、沿岸漁村地域は、過疎化・高齢化や後継者不足といった現実と直面している。環境の悪化や魚値の低迷など、様々な課題があることも事実である。しかし、こうした情勢の中でも、その地域の財産というべき「地域資源」があって、「頑張る人々」がいれば、地域の「未来」がある。本書が、そのような「希望」を伝える存在であってほしいと願ってやまない。

李^り銀^{ぎん}姫^き・本間^{ほんま}咲来^{さき}・木村^{きむら}文子^{ふみこ}

● 東幡豆の場所



東幡豆紀行ガイド

地図上の番号は、本書に掲載している写真が、どこで撮られたものか、もしくはどこを写しているものか、おおよその位置を示したものです。本編の各ページの上にはテーマとともに番号が書かれており、地図上の番号はその番号に対応しています（船や漁などを写した写真は場所が定まらないので、海の上に番号を示しました）。

番号によっては、撮影した地点だったり、写真に写っている場所だったりします。これは、とくに昔の写真は正確な場所を特定できないこと、あるいは写っている場所が広範囲で番号を示せないこと、もしくは撮影場所より写っている場所のほうが東幡豆を知ってもらうにはいいこと、などの理由によります。また、昔と今の場所が大きく違う場合を除いては、ひとつの番号は写真の枚数に限らず1箇所しか記載していません。より詳細な場所を知りたい方は、ぜひ、東幡豆に足を運び、楽しく散策しながら探してみてください。



今昔 東幡豆

*Past and Present
in Higashihazu*

1. 産業を育む海

Sea: Nurturing the Industries

漁業、養殖業、採石業、造船業、海運業など
多様な産業を育んできた
東幡豆の海の昔と今を紀行する。

HIGASHIHAZU GUIDE MAP



昔
Past

【昭和40年（1965）頃・ノリ支柱柵養殖の様子*】昭和30年（1955）に始められ、昭和61年（1986）まで続いた東幡豆のノリ養殖。昭和32年（1957）に12戸あった東幡豆のノリ養殖業者は、昭和35年（1960）には43戸へと増えている。愛知県のノリ養殖が養殖面積・生産量ともにピークを迎えたのは昭和48年（1973）。その後、生産拡大による過剰供給により、安定した収入が得られず、県全体のノリ養殖は縮小していった。

*：西尾市幡豆歴史民俗資料館蔵

★柱柵養殖とは、「ノリそだ」や「ノリひび」と言った竹木を束ねたものを浅瀬に立て、柵を作りそこに生えてくるノリを摘む養殖法。

今
Present

【2014年・アサリ腰マンガ漁の様子】東幡豆の全体漁獲量の中で最も大きな割合を占めるアサリ採貝^{さいかい}漁業。漁法には、腰マンガ漁と手堀り漁の2種類がある。



★腰マンガ漁とは、「マンガ」と呼ぶ漁具を腰につないで、爪を砂に潜らせながら引いてアサリを獲る漁業。



昔
Past

【昭和 35～40 年（1960～1965）頃・海で魚とりの様子* 及び昭和 30 年代・地引網の様子】地引網（右上）と地引網を彷彿させる写真（上）。東幡豆の地引網は、昭和 25 年（1950）頃から東幡豆の中柴、桑畑等の海岸で始められ、昭和 30 年代後半まで続いた。キビナゴ、カタクチイワシ、アナゴ、アジの幼魚、サバなどが 5 月から 7 月にかけて漁獲されていた。



今
Present

【2013 年・地引網体験の様子】今は商業目的の地引網は行われず、環境教育を目的とする子ども向けの地引網体験イベントが、東幡豆漁協の主催により実施されている。昔から変わらないのは、網に入った魚を興味津々で眺める子どもたちの様子。



今
Present

【2016年・東幡豆漁協市場の様子】平屋 671.50㎡の地方卸売市場。小型機船底引網漁業や角建網漁業などでとれた様々な水産物が取扱われている。生産者→産地市場→消費地市場→小売り→消費者という水産物流通経路の中の産地市場に当たる地方卸売市場は、漁獲物の集荷、選別、決済等の機能を持っており、漁獲物の種類が多い沿岸漁業ではとくに重要な役割を果たしている。

★小型機船底引網漁業とは、漁船の後ろに袋状の網を曳いて魚や貝を獲る漁業で、古くから愛知県かくだての代表的漁業となっている。主な漁獲物には、カレイ、クルマエビ、シャコ、アサリなどがある。

★角建網漁業は、沿岸域に漁具を設置し、来遊してくる魚を獲る漁業で、小型定置網漁業の一種である。主な漁獲物には、スズキ、コノシロ、アイナメなどがある。



早朝 3 時頃から 4 時頃まで開場する市場。あがるのは、シタビラメ、カレイ、ワタリガニ、シャコ、クルマエビ等々。





昔
Past

【昭和40年（1965）・造船所の様子】桑畑船溜り近くにあった東幡豆の造船所。幡豆石と呼ばれる石材が桑畑山など近くの山から採石されており、その石材を各地に運ぶための船を製造していた場所。森川近くにも造船所があった。船に旗を揚げているのは新造船を祝う様子。



今
Present

【2016年・造船所があった場所近くから眺める桑畑船溜りの様子】今では造船は行われていない。船に旗を上げて新造船やお正月を祝う風習は、今でも引き継がれている。



昔
Past

【昭和45年（1970）頃・団平船の様子】和船のひとつで船底は平たく、石材等重量のあるものを輸送するのに活用されていた団平船。今では鋼船に変わっている。幡豆歴史民俗資料館では、昭和30年（1955）頃に幡豆石を団平船に船積みする風景の模型が展示されている。

昔

Past

【昭和25年(1950)頃(右)及び昭和31年(1956)頃(下)・石積場の様子】幡豆石を船積みするための場所。花崗岩という種類の幡豆石は、戦国時代に名古屋城築城のときの石垣として用いられており、硬くて重い等の特徴から、古くから河岸や海岸の護岸などに使用されている。



昔

Past

【昭和34年(1959)・伊勢湾台風通過後(上)及び伊勢湾台風直前(下)の様子】明治以降最大規模の台風被害であると言われた伊勢湾台風被害。漁船や団平船等の船舶が家屋の目の前まで押し上げられている様子が台風の凄まじさを物語っている。幡豆町においては、死者、重軽傷者を含め245名の人的被害とともに、696戸に及ぶ家屋の被害、総額3億3,000万円ほどに及ぶ農林水産業などの産業被害を記録。



伊勢湾台風前(昭和33年)

今

Present

【2016年・石材埠頭の様子】石材産業の発展に伴い、運搬船や栈橋の大型化が見て取れる。2017年現在、東幡豆には採石業者が2社ほどあり、昼間は石材を埠頭に運ぶトラックでにぎわう。また今では、幡豆石を加工した優勝カップを競うことから「ストーンカップ」と名付けられた手作りのいかだレースが、毎年8月に東幡豆海岸で行われており、夏の風物詩として観光客を魅了している。



今
Present

【2015年・東幡豆の海の様子】穏やかに広がる東幡豆の海。多様なものを内包する東幡豆の海。多様な産業を育んできた東幡豆の海。



東幡豆の海の様多様な姿。

東幡豆を支えた産業

漁業、採石業、造船業、海運業など、多様な産業を育ててきた東幡豆の海であるが、ここでは、東幡豆を支えた代表的な産業とも呼べる漁業と採石業について、もう少し詳しく覗いてみることにする。

●漁業

東幡豆において、ノリ養殖業①が昭和30年(1955)から昭和61(1986)年まで行われ、地引網漁業が昭和25年(1950)から昭和30年代後半まで行われていたことは、写真で見えてきた通りである。ノリ養殖が次第に縮小していったのには、生産拡大による過剰供給により安定した収入が得られなくなった愛知県全体の背景がある。さらに、幡豆町は当時生産の重点が置かれていた黒ノリの生産期間が他町と比べて短く、その主力が青ノリとなっていたことから、生産量に占める黒ノリの割合が小さいなどの課題も抱えていた。

一方、地引網漁業については、「大した漁はないが、ろくろ廻しの日当くらい出ますよ」と、満足気に語る当時の地引網漁師

の様子が記録されている。「ろくろ廻し」は、陶芸に用いる機械のことであり、愛知県は日本で最大級の窯業地を有するとともに、陶磁史上重要な位置を占めていることから考えれば、陶芸関連は当時潤いのある職業であったことが推測できる。その「ろくろ廻し」に地引網漁業が例えられていたのである。

今では、アサリ採貝漁業②が最も大きな割合を占めるようになっており、その他の主な漁業種類として、小型機船底引網漁業、刺し網漁業、小型定置網漁業(角建網)、つきいそ漁業などがある。2015年における漁業生産量の漁業種類別割合を見ると、アサリ採貝漁業が漁獲量全体の72.8%を占めており、トップとなっている。それに次いで小型底引網漁業が16.2%、小型定置網漁業が8.6%を占めている(p20図1)。産業の縮小、過疎化、高齢化、活力低下など、日本全国の漁業や漁村をめぐる情勢が厳しい中、如何にしてこれらの漁業、とくにアサリ漁業を生かし、地域経済へつなげるかが問われよう。

●採石業

幡豆石は、採石業のみではなく、石材を各地に運ぶための海運業や陸運業、海運に用いる船を製造するための造船業、造船に用いる木材の生産や販売業など、「一石多鳥」の効果をもたらしていた。それは、これらの産業と地元の人々とのかかわりからも確認することができる。一例として、今年(2017年)で築84年、創業67年の民宿鈴喜館の人々を挙げたい。現ご主人の祖父であり、鈴喜館を建てた当の本人でもある鈴木喜八氏は、当時大勢存在していた船大工向けに、木材の卸販売を行っていた。また、ご主人の父親は、東幡豆の近隣地域で、採石業を経営していた。もう一例として、今年で創業38年目となる民宿岡田屋のご主人は、父親の代から幡豆石の海運業を営んでいるのである。

東幡豆の採石業の発展に欠かせない存在として東幡豆港が挙げられる。p.20図2は、昭和24年(1949)から昭和39年(1964)における、東幡豆港の石材積出量の推移を見たものである。昭和24年に

は59,869tであった積出量が、昭和39年には208,801tへと、15年の間およそ3.5倍もの伸びを見せており、石材産業が大きく成長したことが確認できる。とくに、昭和28年(1953)から昭和30年(1955)には69%の成長率を見せるとともに、昭和34年(1959)から昭和36年(1961)には83%の高い成長率を見せている。それは、硬くて重いなどの特徴を有する幡豆石が、昭和28年に発生した台風13号や昭和34年に発生した伊勢湾台風⑧の復旧工事に、大量に用いられたからであるとされている。

かつては、トロッコで丁場(石切場、採石場)から積み出し港まで運ばれ、団平船⑥で各地に運ばれていた幡豆石の運搬は、今ではトロッコがトラックへと、団平船が「ガット船」と呼ばれる鋼船へと変わっている。幡豆石や採石業は、今でも東幡豆の経済において大きな役割を果たしており、今後は観光業など他産業との連携により地域振興を図ることが期待されよう。

(李 銀姫)

旅日記
Vol.1

東幡豆にあそんだ
楽しい旅の記録。
はじまりはじまり～

名鉄蒲郡線



早く着かないかな～



蒲郡駅～吉良吉田駅間を結ぶ2両編成の赤いかわいい電車で、東幡豆へ向かいます。車窓から三河湾や西尾市の町並みのんびり眺めることができます。

東幡豆駅に到着

小さな無人駅だけれど人の行き来は意外と多いのです。駅で会った地元の方々と何気ない会話が弾みます。



赤い屋根がキュート

海岸にて



駅からわずか徒歩3分のところに、心地よい海風にあたりながらのんびり散歩ができる海岸があります。小さな子どもは時を忘れてシーグラスや貝殻拾いに夢中になります。たくさん集めて満足そう。



たくさん拾ったね

冬鳥の訪れ



11月頃にはホシハジロやヒドリガモ、オオバンなどの冬鳥が飛来し、海辺で羽を休めています。バードウォッチングが楽しめます。

・データで見る東幡豆の漁業と採石業・

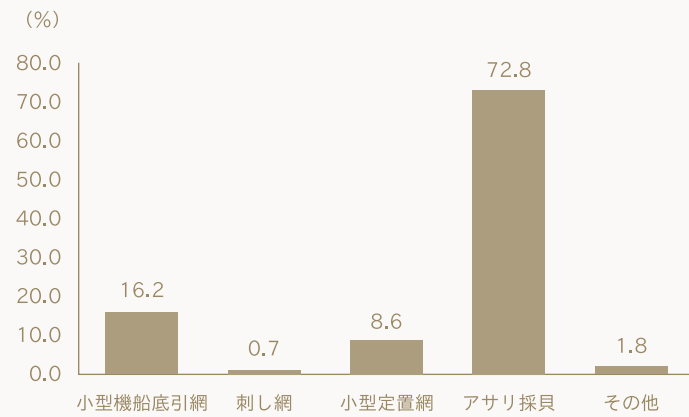


図1 東幡豆における漁業生産量の漁業種類別割合（2015年）

出処：『東幡豆漁協業務報告書（H27）』より作成。

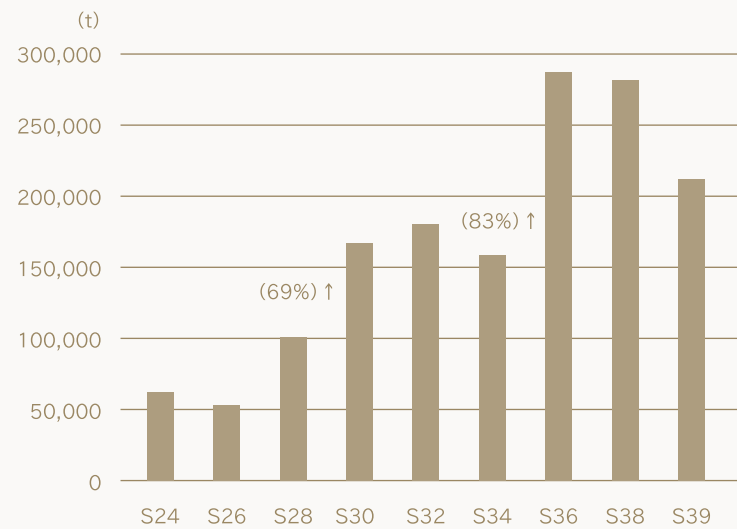


図2 東幡豆港における石材積出量の推移

出処：『幡豆町史本文編3—近代・現代』より作成。

2. 繁栄を育む海

Sea: Nurturing the Prosperity

観光業という名のもう一つの産業、
半世紀弱にわたって富を育んできた
東幡豆の海の昔と今を紀行する。



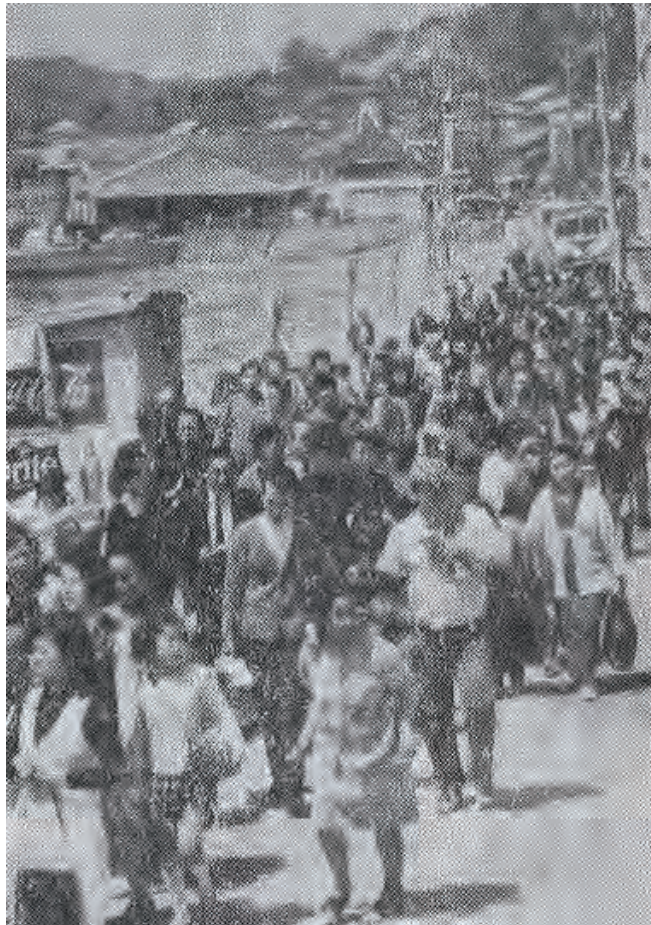
昔 Past 【昭和 39 年（1964）頃・三ヶ根山から眺める海の様子】^{がまごおり} 蒲郡市、^{こうだ} 幸田町、西尾市の境界にある標高 326m の^{さんかねさん}三ヶ根山。昭和 33 年（1958）に、三ヶ根山を含む三河湾一帯が国定公園に指定され、翌年の昭和 34 年には年間 50 万人の観光客数を記録。また、昭和 43 年（1968）には全長 11.8km、幅 5.5m に及ぶスカイラインが開通している。海的全貌が前に広がる三ヶ根山は、写真撮影スポットとして人気を誇っていたことがうかがえる。



今 Present 【2016 年・グリーンホテル三ヶ根から眺める海の様子】毎年 6 月から 7 月初旬にかけて 7 万本ほどのあじさいが咲くことから「あじさいロード」、「あじさいライン」とも呼ばれる三ヶ根山スカイライン。あじさい祭りをはじめ、今では紅葉、イルミネーション、夜景等を楽しむ場として知られており、2015 年には 133,461 人の観光客が三ヶ根山スカイラインを訪れている。島々（沖島・左、前島・右）を包み込む海の景色は依然として美しい。



山頂に児童遊園地や回転展望台があり、山頂までのロープウェイが整備されていた。



昔

Past

【昭和 47 年（1972）・うさぎ島、猿が島へ向かう観光客の様子】可愛い動物と一緒に遊べる島というコンセプトで、昭和 32 年（1957）に開島されたうさぎ島と猿が島。通称は前者が前島、後者が沖島。昭和 60 年（1985）のゴールデンウィーク期間中に、両島を訪れた観光客は 17,000 人ほどにのぼると記録されている。



今

Present

【2013 年・前島へ向かう大学実習生の様子】今では一味違う姿を見せるこの道。写真は、2013 年より、毎年 8 月終わりから 9 月はじめの 3 日間において実施される大学の実習で、前島に向かう東海大学海洋学部の学生たちの様子。この頃になると、彼らに笑顔で声をかけてくれる地元住民もよく見られる。



昔

Past

【年代不詳・うさぎ島春まつりの様子】昭和 32 年（1957）に開島されて以来、定期的に行われていた「うさぎ島春まつり」。写真は第 10 回目となる時の渡り船乗り場（海岸側）の様子で、昭和 40～50 年代だと思われる。紅白色で鮮やかに彩られた乗り場の後方に広がるのは、綺麗な青色の海。うさぎ島にやってきた春を感じさせてくれる。



昔
Past

【昭和30年（1955）頃・うさぎ島渡船乗り場の様子】
渡船を利用してうさぎ島に渡る人々でにぎわう渡船乗り場。当時、東幡豆には名古屋鉄道の運営以外に、個人経営の渡船もあった。



今
Present

【2015年・前島船乗り場の様子】
今では船乗り場へ向かう道や棧橋が整備されており、漁船だけではなく、環境教育のプログラムとして実施されるミニクルーズや大学の実習等で用いる船により活用されている。



昔
Past

【昭和40年（1965）頃・名鉄観光船の様子*】
名古屋鉄道が運営する観光船が昭和32年（1957）から運航され、39年の間に1,000万人以上の観光客を東幡豆港とうさぎ島・猿が島間で運んでいた。その後、高速道路の整備やマイカーブーム等による観光客の減少を背景に、平成9年（1997）で廃止となった。右の写真は平成9年の観光船の様子。



【昭和40年（1965）頃・名鉄観光船事務所の様子】
観光船のチケット販売とともに、売店や休憩スペースがあり、学校帰りの学生たちの憩いの場であった。



左から、昭和39年(1964)・監視台*、昭和39年・飛び込み台、昭和44年(1969)・海水浴場を清掃する幡豆ボーイスカウトの様子。昭和42年(1967)に幡豆ボーイスカウトが、健康で明るく規律ある人間育成を目的として発足されている。

昔 past 【昭和39年(1964)頃・東幡豆海水浴場の様子*】海水浴場として大賑わいの東浜海岸。東幡豆海岸が海水浴場として広く知られるようになるのは、昭和2年(1927)に「新愛知」(中日新聞の前身の一つ)が選奨する県下10名所に入選してからである。その後、昭和24年(1949)に幡豆郡10名所にトップとして選定されたことや、翌年の昭和25年に幡豆観光協会が設立されたこと、県立公園の一環へ編入されたことなどを通して飛躍的な伸びを見せる。とくに、昭和24年からの3年間は「うなぎ上り三カ年」と呼ばれた。



2013年・体験地引網の様子。

今 present 【2016年・海水浴場であった海岸で遊ぶ子どもたちの様子】今では海水浴場としてではなく、東幡豆駅から徒歩3分という好立地から、観光客が気軽に遊べて癒しを求める場となり、体験地引網等のイベントの場ともなっている。



昔

【昭和31年(1956)頃・民宿鈴喜館の様子】東幡豆の繁栄期を支えた民宿、鈴喜館。昭和8年(1933)に、鈴喜館ご主人の祖父である鈴木喜八氏が別荘として建てており、自らの名前をとって鈴喜館と名付けたという。その後、戦時青年男子の鍛錬場としての海洋道場や、海水浴客向けの季節旅館等を経て、民宿にいたる。昭和25年(1950)の営業開始から今年(2017)で67年目を迎える歴史ある民宿。写真は、左から鈴喜館ご主人の母方の祖父、祖母、叔母。



昔の写真と同じ角度から撮影したもので、撮影依頼に快諾してくれたご主人(左)と奥さん(右)。

今

【2016年・民宿鈴喜館の様子】80数年の月日が流れた今でもその気品は変わらない大きな屋敷。収容人数の大きさから今では様々な団体客が宿泊しており、近年は東海大学海洋学部の実習時の定宿となっている。



昔

【昭和31年(1956)頃・岡田屋の様子】東幡豆の繁栄期を支えたもう一つの民宿、岡田屋。昭和54年(1979)から営業しており、今年(2017)で38年目を迎える。岡田屋の前でバイクに乗っているのはご主人の亡き父。



岡田屋近くで撮影された子どもたちの様子。



宿だけではなく、モーニングとランチをやっているのが岡田屋の特徴。

今

【2016年・岡田屋の様子】森川の近くにある今の岡田屋。昔の建物は台風により流されてしまったためこの場所に移ったという。岡田屋のご主人は父の代から幡豆石の海運業を営んでおり、お店を切り盛りしているのは、奥さん、娘さんと住み込みの板さん。





昔
Past

【昭和 28 年（1953）頃・桑畑山から眺める町】海に寄り添い、自然の恩恵をたっぷり享受してきた東幡豆の町並み。海岸には、江戸時代に植えられたと言われる防風林が広がる。

今
Present

【2016 年・とうてい山古墳への中途から眺める町】♪ ソレ幡豆は良いところ、幡豆はサツテ // よいところ、山と海との夢の町、ソレサよよい夢の町…。幡豆音頭の一節が思い浮かぶ。



海側から眺める東幡豆の町並み（2016 年）。



名古屋鉄道（通称：名鉄）による海水浴客の誘致が始まった昭和24年（1949）から、うさぎ島・猿が島観光船が休止となった平成9年（1997）までの半世紀弱にわたって、町に富を育ててきた東幡豆の観光業は、大きく海水浴、うさぎ島・猿が島、三ヶ根山、の3つに分けてみる事ができる。

●海水浴¹⁵

東幡豆の海水浴場の場所は、東幡豆漁協から森川までの東浜と呼ばれる海岸であり、かつては妙善寺の表浜であった。この海水浴場は昭和2年（1927）に、県下10名所に入選してから広く知られるようになり、昭和24年からは本格的な伸びを見せるようになった。p.36表1は、昭和24年から昭和28年（1953）における海水浴客の状況を見たものである。とくに著しかったこの時期の海水浴客の増加ぶりは、「うなぎ上り」とも言われていた。

詳しく覗いてみると、昭和24年7月の16,429人、同年8月の26,702人から、昭和26年（1951）の7月には

一日で15,000人、同年8月にも一日で20,000人もの海水浴客が押し寄せている。また、昭和28年7月にも一日で10,000人もの海水浴客を記録している。さらに特筆すべきことは、各種記事に使用された当時の状況を描写するワードである。上述の「うなぎ上り」に加え、「驚異的数字」、「芋を洗う混雑」、「最高記録」、「最高の大混雑」、「うれしい悲鳴」等々が使われており、当時の海水浴の賑やかぶりを如実に物語っている。

その後、愛知こどもの国の開園（昭和47年）や他の海水浴場の整備（寺部海水浴場・昭和55年）などによる観光地の分散化、高速道路の整備やマイカーブームなどによる幡豆町全体の観光客の減少を背景に、海水浴場として使われなくなり、今では海岸散策や体験漁業等の場となっている。

●うさぎ島・猿が島¹¹¹²¹³¹⁴

うさぎ島・猿が島においては、昭和25年（1950）から昭和26年（1951）にかけて、電灯の設置や植樹、道路整備、道

路中間に架橋など、観光開発を目的とした一連の整備が行われるとともに、うさぎや猿などの可愛い動物が放し飼いされ、昭和32年（1957）に開島されるようになった。両島が開島された昭和32年は、東幡豆港、うさぎ島・猿が島、西浦温泉を結ぶ名鉄観光船が運航されるようになった年でもある。

その後も、昭和45年（1970）に公衆便所の設置などインフラの整備が続けられた。昭和52年（1977）には開島20周年の記念イベントとして、「写生大会」や「さくら茶会」など一連の魅力的な行事が大々的に行われている。昭和60年（1985）には、クジラの頭にうさぎと猿の模型がのっているクジラ型遊覧船が就航されるようになり、大きな注目を浴びた。そして、昭和63年（1988）には、約700m離れたうさぎ島と猿が島の間で、世界初の海上綱引大会が行われ、さらなる盛り上がりを見せた（p.36表2）。今では、呼び名が前島と沖島に戻り、前島のみが潮干狩りや環境学習、実習などで人々が訪れる場所に

なっている。

●三ヶ根山¹⁰

一方、三ヶ根山においては、昭和27年（1952）から総合開発計画が定められるとともに、着々と観光開発が進められた。町政が施行されて30周年となる昭和33年（1958）には、三ヶ根山を含む三河湾一帯が国定公園に指定され、「喜び多い昭和33年度」が大きく記事のヘッドラインを飾った。そして、2年後の昭和35年（1960）には、国民宿舎のホテル三ヶ根荘が建設され、昭和38年（1963）には国際施設と呼ばれる有料休憩所、子供遊園地、回転展望台などが次々と完成している。

その後、昭和43年（1968）にスカイラインの開通、昭和44年（1969）に長さ2002mの遊歩道や無料駐車場の整備、昭和60年（1985）にあじさいラインの整備などが順次行われ、三河湾の観光スポットとして定着したのである。今でも三ヶ根山からの眺望は素晴らしく、毎年一定規模の観光客が訪れている。（李銀姫）

旅日記
Vol.2

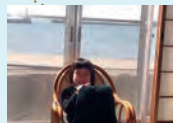
ランチのあとは
散策タイム。
旅はまだこれから！

岡田屋でランチ

新鮮な海の幸を使ったボリューム満点のランチをいただきました。お造りも煮魚も最高においしい。地元の人たちの憩いの場でもあり、モーニングも名物です。



みんなでしばしの歓談



座敷からは海が臨めます

路地裏歩き

昔ながらの漁村は狭い路地が入り組んでいます。歩いているだけでちょっとした探検気分です。



船の絵のマンホール



海辺をお散歩

船溜りには漁船が停泊していました。海辺の神社の境内には小さな児童公園もあります。



・資料に見る東幡豆の観光業・

表1 新聞記事から見る東幡豆の海水浴

掲載日	使用されたワード	人数の詳細	人数
1952.7.26	うなぎ上り、驚異的数字	S24年7月の人数(東幡豆)	16,429
//	うなぎ上り、驚異的数字	S24年8月の人数(東幡豆)	26,702
1951.7.29	戦後最高記録、芋を洗う混雑	一日の人数(東幡豆)*	15,000
1951.8.5	戦後最高の大混雑	一日の人数(東幡豆)*	20,000
1951.8.16	うれしい悲鳴	7月中旬～8月半ばの人数(幡豆)*	200,000
1953.7.31	道路が通行困難なほど人の波	一日の人数(東幡豆)*	10,000

注：*はアバウトの人数

出処：『幡豆町史資料編3 近代・現代』より作成。

表2 うさぎ島・猿が島および三ヶ根山における観光開発

年度	うさぎ島・猿が島の主な出来事	年度	三ヶ根山の主な出来事
S25	前島に電灯設置	S27	三ヶ根山総合開発計画の開始
S26	前島に植樹、300mの道路整備、道路中間に架橋	S33	三河湾一帯が国定公園に指定
S32	うさぎ島・猿が島の開島、名鉄観光船の運航開始	S35	国民宿舎ホテル三ヶ根荘の建設
S45	うさぎ島、猿が島に公衆便所完成	S38	有料休憩所、子供遊園地、回転展望台の完成
S52	開島20周年記念イベント	S43	スカイライン開通
S60	クジラ型遊覧船が就航	S44	2002mの遊歩道、無料駐車場の完成
S63	うさぎ島・猿が島の海上綱引大会	S60	あじさいラインの完成

出処：『幡豆町史資料編3 近代・現代』、『幡豆町報』より作成。

東幡豆 / 今昔

Past and Present
in Higashihazu

3. 暮らしを育む海

Sea: Nurturing the Life

海とともに生きる人々の暮らし、
美しさと豊かさと誇りを育んできた
東幡豆の海の昔と今を紀行する。



昔
Past

【昭和 28 年～ 41 年（1953～1966）頃・町並みの様子】上は昭和 41 年（1966）頃の森川近辺の路地の様子。この頃は森川の水量が豊富にあり、道はまだ砂利道の様子。横には、潮風から守るために黒く塗られた黒壁の家屋が並ぶ。下は昭和 28 年～ 33 年（1953～1958）頃の幡豆町看板周辺の様子*。「幡豆村」が町制を施行し「幡豆町」となったのは昭和 3 年（1928）。その時から建てられていた看板であると見られる。



今
Present

【2016 年・町並みの様子】昔からの家屋が多く残っており、新旧家屋の混在した歴史溢れる町へと変わっている。黒壁の家屋は現在でも見られる。下は東幡豆駅の様子。昭和 11 年（1936）に開業されて以来、とくに観光が盛んであった時代は、名鉄蒲郡線の拠点として活躍した。また、幡豆石を各地に運ぶ貨車が利用する駅でもあった。乗車料金は、2017 年現在、蒲郡から東幡豆まで片道 350 円。





昔
Past

【昭和 52 年（1977）・津島神社の様子】東幡豆は森組、^{こけん}小見行組、桑畑組等の組（地区）に分かれており、津島神社は小見行組の氏神社である。時折、結婚式も行われていたようである。後方には豊かに茂った松の木と鳥居の様子が確認できる。



昔
Past

【昭和 31 年（1956）・八幡宮の様子】森組の氏神社である八幡宮、地元では森神社とも呼ばれる。写真は、神社のお祭り（上）の様子と幡豆青年団所属の森組青年団（右）。幡豆青年団の別称は幡豆町青年団体連絡協議会（幡青協）。昭和 25 年（1950）に誕生し、様々な活動を行っていた。



今
Present

今でも森神社は、地区の集会やお祭りが開かれたり、地元住民がお参りに訪れたりする場所であり、暮らしの身近な存在となっている。



昔
Past

【昭和49年（1974）・妙善寺の様子】最初は天平年間（729～749年）に創建された天台宗の寺院であった。現在は、「浄土宗西山深草派」という宗派に属する。通称ハズ観音、かぼちゃ伝来発祥の地としてかぼちゃ寺とも呼ばれる。この地で祈れば病はたちどころに癒え、とくに成人病予防、中風除けに靈驗あらたかと信仰を集めている。



今
Present

【2016年・妙善寺の様子】今も全国各地よりたくさんの人々が参拝に訪れる三河の名刹。毎年冬至の日には、全国各地より寄贈された南瓜を用いた「かぼちゃしるこ」が参拝者に振舞われることで有名。建物の両側に見えるマキは、天然記念物として町の文化財に指定されている。



昔
Past

【昭和40年（1965）頃・妙善寺前広場の様子】当時は東幡豆海岸発展会が発足されており、妙善寺前の広場で盆踊り等様々なイベントを企画していた。写真は盆踊りの様子。簡易ステージが作られ、ステージ上で盆踊りを踊っている踊り手たちを見る人たちで賑わう。今では、大学の実習で訪れる大型バスの駐車場や地元住民が世間話等に集う場へと変わっている。

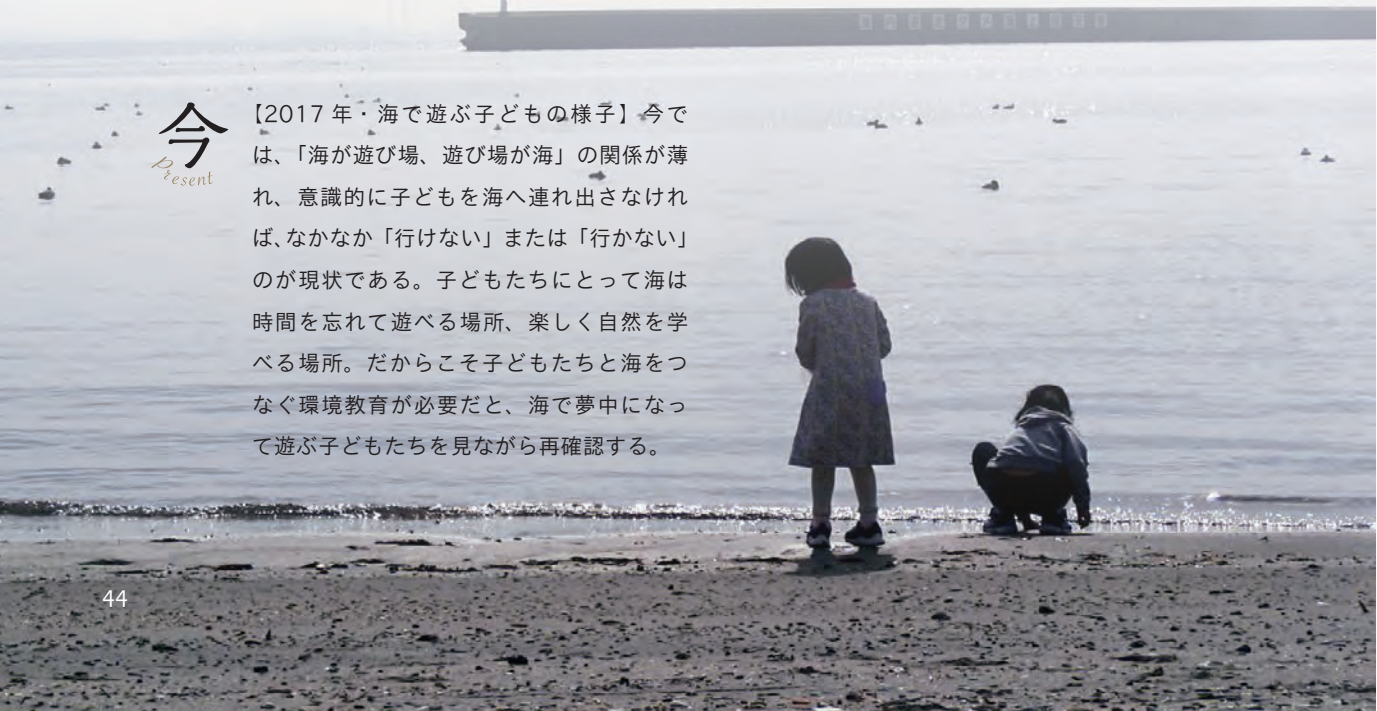


昔
Past

【昭和 28～33 年（1953～1958）頃・海で遊ぶ子どもの様子*】海泳ぎ、砂遊び、石遊び、貝殻遊びなど、子どもたちにとって、「海」といえば遊び場、「遊び場」といえば海であった頃の様子。干潟では、子どもたちが手づくりマンガで、エビやカニ、カレイ等をとって遊んでいたという。

今
Present

【2017 年・海で遊ぶ子どもの様子】今では、「海が遊び場、遊び場が海」の関係が薄れ、意識的に子どもを海へ連れ出さなければ、なかなか「行けない」または「行かない」のが現状である。子どもたちにとって海は時間を忘れて遊べる場所、楽しく自然を学べる場所。だからこそ子どもたちと海をつなぐ環境教育が必要だと、海で夢中になって遊ぶ子どもたちを見ながら再確認する。



今
Present

【2017 年・魚直の様子】今年（2017 年）で創業 90 年目を迎え、東幡豆の魚食を支えてきた魚食処、魚直。現在の場所に移ったのは昭和 42 年（1967）。それまでこの場所は、東幡豆漁協の事務所であった。ご主人、ご主人の息子夫婦、奥さんの兄弟夫婦 5 人で切り盛りしている。

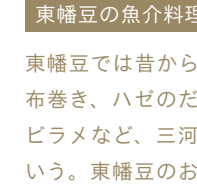
東幡豆の魚介料理あれこれ



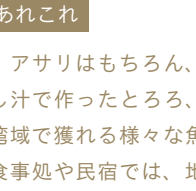
ワカメのしゃぶしゃぶ



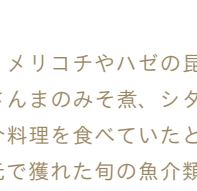
アサリの酒蒸し



焼きガザミ



イワダコ煮と地元の酒・尊皇



コウソウガレイの煮付け



茹でアカニシのお刺身



大アサリの浜焼き



昔
Past

【昭和40年（1965）頃・お稚児さんの様子】稚児行列に参加する子ども。今でも稚児行列の風習は、お寺や神社のお祭りやお祝い事の時に見られる。写真(上)は森神社にて。



昔
Past

【昭和39年（1964）頃・森川の様子】主婦たちが子どものおしめを洗ったり、子どもたちがうなぎのつかみ取りや手作り柴（木の枝を束ねたもの）でエビやカニをとって遊んだり、河口では人々がアサリをとったりしていた森川。写真は岡田屋ご主人の祖父と妹さん。



今
Present

【2017年・森川の様子】今の岡田屋の前を流れる森川。地元住民がアサリをとる様子は今でも時々見かけられる。写真は、左から岡田屋のご主人、奥さん、板さん、娘さん。

昔

Past

【昭和 39 年（1964）頃・海辺にて地元女性の様子】森川すぐ横の堤防で撮影された美しい女性は、魚食レストラン魚直の奥さん。後方には、泳ぎやボート遊びで海を楽しむ人々が写っており、海水浴場で人気であった時代を彷彿とさせる。



今

Present

【2016 年・海辺にて観光客の様子】今でもこの場所は、地元住民や観光客の撮影スポットとしての役割を果たしている。幡豆石で建てられた堤防の様子も変わらない。緑色に広がるのは、観光客の子どもたちが時々間違っってワカメと呼んでいるアオサ。



昔

Past

【昭和 46 年（1971）・神前橋にて地元女性の様子】「美しい湖に架かる橋に美しい女性が立つことは罪である」という、美しすぎる自然と人の融合を表現した台湾小説家チョンヤオ氏の、西湖（中国浙江省）を舞台にした作品が思い浮かぶ。写真の女性は、岡田屋ご主人の叔母。右後方には昔の岡田屋が写る。



今

Present

【2017 年・神前橋にて観光客の子ども様子】海が写り、川が写るここは、地元住民だけではなく、観光客もワンショットを残したくなる場所。写真は、森川河口の生き物を夢中で見ている子どもたちをカメラがとらえた様子である。



東幡豆の人々は、自然（とりわけ海）と調和した暮らしを送りながら、古くからの伝統行事などを大切にしている。ここでは、日常が垣間見えるエピソードを、海とのかかわり、民俗文化の面から紹介したい。

●海と人々のかかわり

海はすぐそこにある身近な自然であり、魚介が生息する恵みの産物であり、さらには子どもたちの親しい友人である。

民宿鈴喜館のご主人が子どもの頃（1970年前後）は、海で魚をとって遊ぶのが普通のことだったという。例えば満潮時に古タイヤを海に投げ入れておく。潮が引いて干潟にあがったタイヤを覗くと、タイヤの輪の中に取り残されたうなぎを発見できるのだそう。ヤマモモの木の枝を束ねて沈めておいても、アナゴが入っていたりする。それから、この地域でよくとれておいしい魚介といえばモガニ（ガザミの通称）なのだが、そのとり方として、モガニが潜り込んでいる岩と岩のあいだに軍手を2枚はめた手をそっと入れる。するとモガニが軍手をハサミで挟んでくる。

そうして、痛いけれどじっとがまんして、最後にはモガニの捕獲に成功するのである。ちなみにこのモガニをかまぼこ板に巻き付けて、カニが好物であるタコを釣ったりもしたようだ。

昔は今と違って娯楽と呼ばれるものの種類が少なかった。その分、子どもたちは工夫して、身近な海で楽しく遊んでいたようである。遊びに使うものも、身の回りにあるものばかり。物は少なくとも、豊かな暮らしがあったことがうかがえる。

現在はというと、子どもたちが海へ入ったり泳いだりする機会はほとんどなくなっている。とはいえ、今も海岸で貝殻拾いをする子どもたちや海岸沿いを散歩するお年寄りの姿を見ることが出来る。魚食²⁵で見たように、海は変わらず美味しい魚介類を恵んでくれるし、アサリの時期になると人々は森川²⁷や海岸でアサリとりをするという（地元住民に限り、潮干狩り場ではなくても自由にアサリをとることが出来る）。海での遊び方や海との付き合い方は変わったが、海が暮らしに寄り添っている

ことは昔も今も同じである。

●「組」と地域に根ざした民俗文化

東幡豆には小さな神社が点在している。これは、東幡豆地区がさらにいくつかの「組」に分けられており、組ごとに氏神社があることがひとつの理由である。「組」は町内会の区切りであり、明治時代まであった「村」の名残でもある。

ここで東幡豆の変遷について簡単に述べておくと、まず、明治11年（1878）に、東幡豆地区の9村が合併して「東幡豆村」となった。そのときの村が、^{ししかわ}鹿川村、^{すまき}洲崎村、^{ひこだ}山口村、^{うへはた}谷村、^{くわはた}彦田村、^{こけんぎょう}桑畑村、森村、小見行村で、これが今の「組」の前身といえよう。明治39年（1906）には、東幡豆村は隣の幡豆村（西幡豆、鳥羽、寺部からなる村）と合併して「幡豆村」になる。その後、幡豆村は町制を施行し、「幡豆町」となったが、2011年に西尾市へと編入され、東幡豆は「西尾市東幡豆町」として今にいたる。

すでに見たように、例えば津島神社²⁰

は小見行組の氏神社であり、八幡宮²¹は森組の氏神社である。今でも人々は新年の初詣、年一度のお祭りといった特別なイベントのほか、日常的に氏神社へ赴き、お参りをしたり、公民館で集会をしたり、境内の清掃をしたりして、自分たちの守り神を身近に感じながら大切にしている。

沖島には、民話にも登場する弁財天が頂上の沖島社に祀られており、毎年秋には大祭が行われる。この祭礼を執り行うのは小見行組である。当日はまず子ども神輿が「ワッショイワッショイ」と元気よく町を練り歩き、その後、船に乗り込んで人々は沖島を目指す。島では沖島社の扉を開いて弁財天に祈願をし、皆でふるまいの品をいただき、お社から餅投げをする。先祖代々受け継がれてきた祭事が、今もこうしてつがなく遂行されている。

東幡豆では、地域のつながりや古くからの風習を大切に懐かしくあたたかい暮らしが今なお営まれている。それは、ここに生きる「人」の確かな存在があってこそなのである。（本間咲来）

旅日記
Vol.3

たくさん見て歩いて
ついに宿に到着。
でも夜は長いのです…

トンボロ干潟



みんなで
記念撮影

干潮時に現れるトンボロ干潟。昔の子どもたちも、前島まで歩いて行って、遊びながらカニや貝をたくさんとったんだそう。

妙善寺

ハズ観音妙善寺には、通称「かぼちゃ寺」という名にちなんで、冬至前の11月には境内にたくさんのかぼちゃが鎮座していました。



かぼちゃの中に
観音様が！

民宿鈴喜館

本日のお宿はこちら。主館は切妻造の洋館風和風建築。離れもたくさんある大きな民宿です。



広い部屋で大はしゃぎ



深夜のセリを見学

小規模ながら、いろいろな魚介が小さな船でどんどん届きます。セリ場にはかわいい来客（猫）も。落ちた魚をちゃっかり加えて、すたこらさっさと闇に消えていきました。

ごちそうがいっぱいニャン



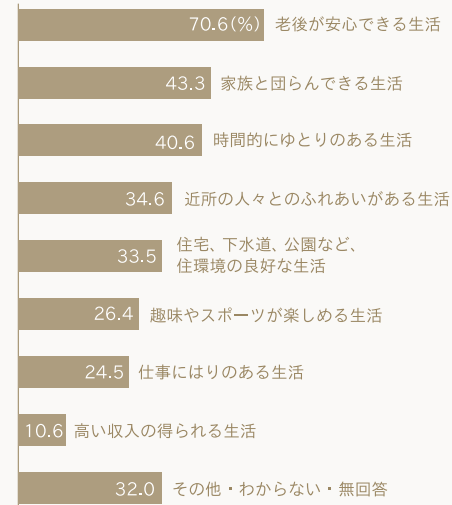
・資料に見る約30年前の幡豆地区の人々・

昭和63年（1988）に幡豆町が町民500人にとつた「21世紀、ふるさと幡豆の町づくり」アンケートから、当時の人々の人生観や価値観、地域の自然についての認識などが垣間見えるものをピックアップして紹介する。

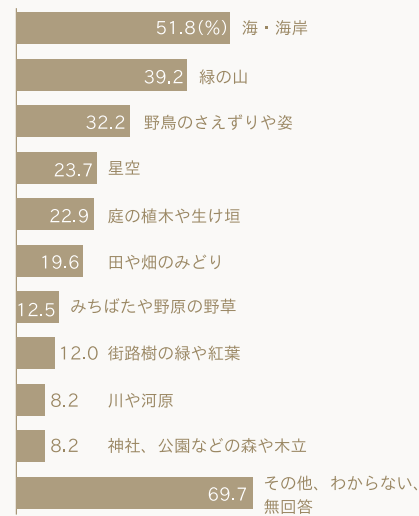
Q. あなたが日常生活の中で心掛けたり、目標としている「生きがい」や「モットー」は何ですか。



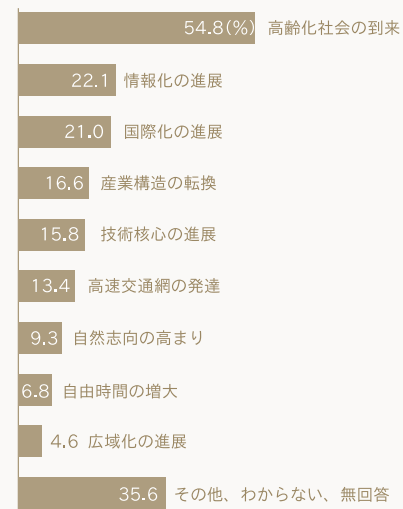
Q. あなたは、将来どのような生活をしたとお考えですか。



Q. お住まいの地域の自然の中で、あなたがふだん気に入っている好きなものは何ですか。



Q. 現代の社会は様々に変化しておりますが、今後一層変化すると思われるものは何ですか。



注：それぞれの質問について、1人は3つまで回答できる。
 出処：『広報はず』412号（昭和63年〔1988〕11月）より作成。

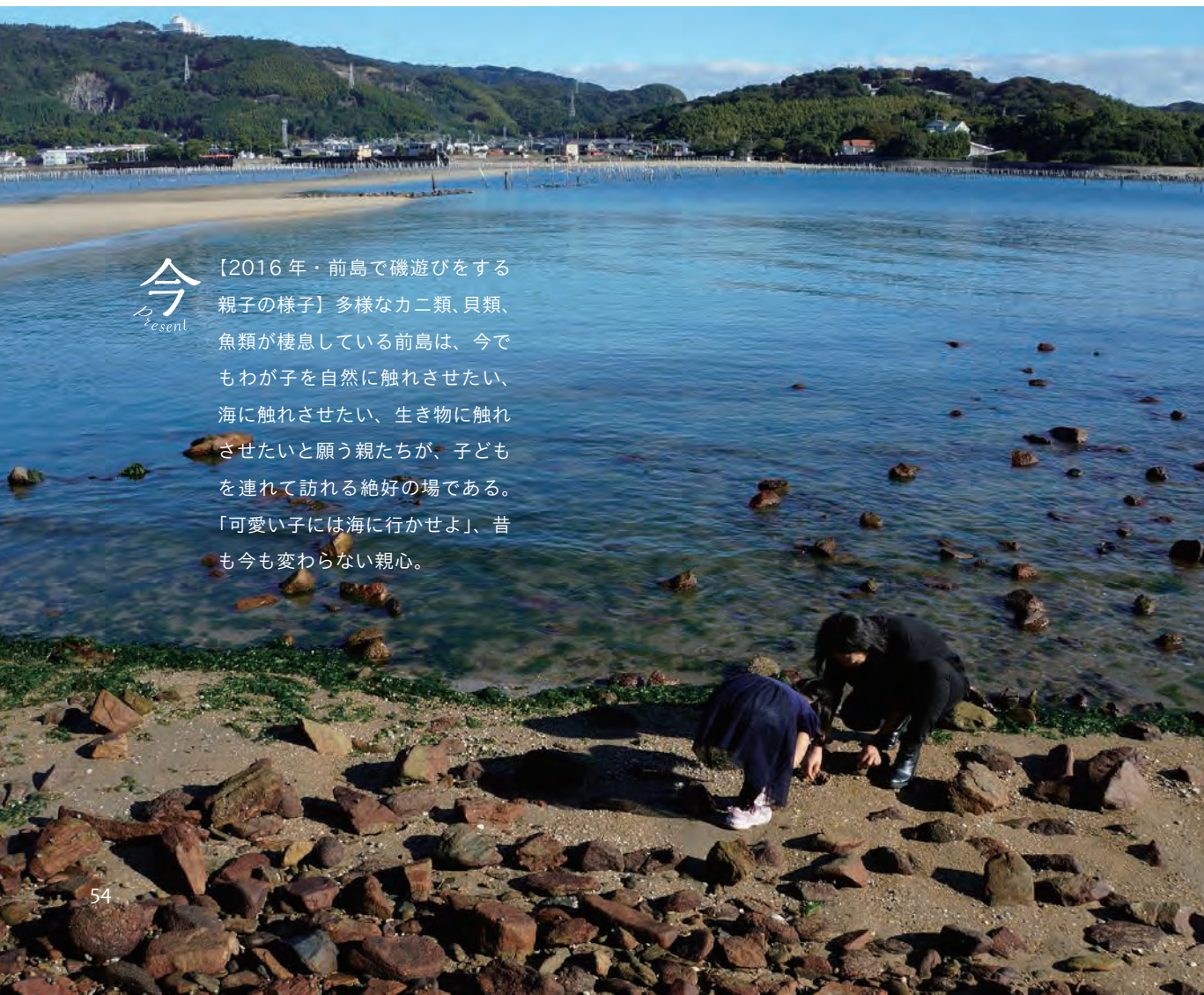
4. 未来を育む海

Sea: Nurturing the Future

自然資源から文化資源にいたる
 多様性に富む地域資源を育ててきた
 東幡豆の海の昔と今を紀行する。

昔
Past

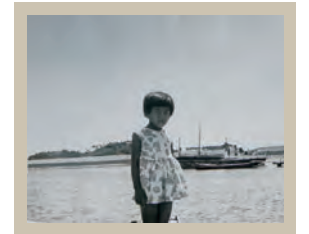
【昭和 39 年（1964）頃・うさぎ島で磯遊びをする親子の様子】昭和 32 年（1957）に開島され、大勢の観光客を魅了したうさぎ島は、地元住民の子育てや子ども教育の場でもあった。岩の下に潜む生き物を夢中になって探るわが子の様子を笑顔で眺めている親、微笑ましいワンシーンである。



今
Present

【2016 年・前島で磯遊びをする親子の様子】多様なカニ類、貝類、魚類が棲息している前島は、今でもわが子を自然に触れさせたい、海に触れさせたい、生き物に触れさせたいと願う親たちが、子どもを連れて訪れる絶好の場である。「可愛い子には海に行かせよ」、昔も今も変わらない親心。

昔
Past



【昭和 39 年（1964）頃・海とともに写る子どもの様子】何気なく撮る写真にはいつも海が写る。



今
Present

【2016 年・海を眺める子どもの様子】海の彼方を眺める子、海の未来を眺める子。





昔
Past

【昭和45年(1970)・トンボロ干潟潮干狩りの様子*】潮の満ち引きにより干出と水没を繰り返す干潟には、多くの生き物が棲息している。トンボロ現象が現れることから「トンボロ干潟」と呼ばれているここ東幡豆の干潟にも、アサリをはじめとする様々な生き物が棲んでおり、昔から潮干狩りの名所となってきた。昭和60年(1985)のゴールデンウィーク期間中には、31,600人が東幡豆の潮干狩りに訪れている。



今
Present

【2013年・トンボロ干潟潮干狩りの様子】今でも毎年3月終わりから7月頃まで、トンボロ干潟で潮干狩りを楽しむことができる。とくに、穴が開いているところに塩をかけ、ピョコンと出てくるマテガイを瞬時に引っ張るとるマテガイとりは、この名物である。2015年には41,270人がトンボロ干潟の潮干狩りに訪れている。



★トンボロ現象とは、満潮時には海によって隔てられている陸地と島が、干潮時になると繋がる現象を言う。





今
Present

【2014年・子ども向け環境教育の様子】トンボロ干潟は、潮干狩りで「遊ぶ」場であると同時に、今では環境学習で「学ぶ」場でもある。年間約500人の子どもたちが、「学び」のトンボロ干潟を訪れている。



今
Present

【2015年・大学教育の様子】2013年からは、東海大学海洋学部の専門科目である「海の自然観察実習」がトンボロ干潟で実施されており、その実習は生物採集、サンプル分類、磯観察、分布調査、高低差測量、生物マップ作成など多様な内容で展開されている。トンボロ干潟は今、従来の生物多様性の維持や水質の浄化等の機能に加え、大学教育の場としての機能も果たしている。





昔
Past

【昭和 39 年（1964）頃・東幡豆漁協の様子】環境教育、大学教育等トンボロ干潟の多様な機能を果たせること
の背景に、東幡豆漁協の存在がある。東幡豆漁協は、他の漁協同様、長い漁業歴史の中で、漁業秩序の維持、資源管理等の役割を果たしてきた。



今
Present

【2017 年・東幡豆漁協の様子】資源減少、魚価低迷、コスト上昇という三重苦を抱える今日の漁業をめぐる情勢の中で、東幡豆漁協はアサリ種子の散布やガザミ・クロダイ等の放流、藻場・干潟の保全等資源管理のほか、環境教育の積極的展開による地域活性化も図っている。多様な努力により、今では地元住民から信頼される存在となっている。



★漁協の正式名称は漁業協同組合。明治 19 年（1889）に、明治政府が「漁業組合準則」を公布し、各地に「漁業組合」を設立したのがその原型。その後、昭和 8 年（1933）に漁業組合が経済事業を行うことが可能となり、名称も「漁業協同組合」へと変わる。



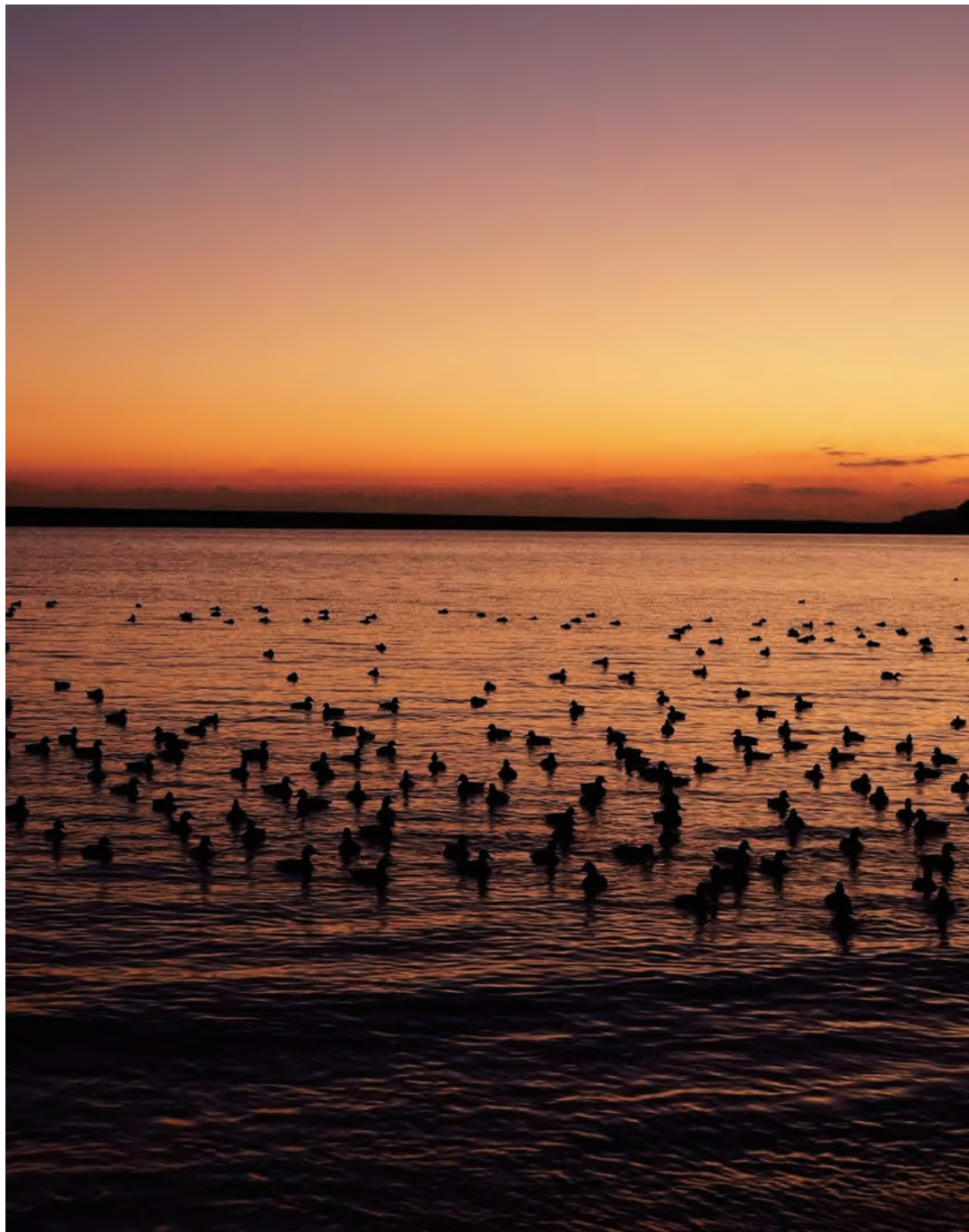
昔
Past

【昭和 36 年（1961）・東幡豆の海と写る現漁協組合長の様子】このような漁協でリーダーシップを発揮しているのは、言うまでもなく漁協組合長。中学校を卒業後漁師となった石川金男氏は 2003 年に組合長に就任し、現在にいたる。写真は、漁船のエンジンルームの上に座り東幡豆の海を眺める様子。右後方には、桑畑山の石切場（採石場）が写る。



今
Present

【2016 年・現漁協組合長の環境教育現場での様子】就任以来、東幡豆区コミュニティ推進協議会、幡豆地区干潟・藻場を保全する会、幡豆地区農山漁村地域協議会漁活性化部会、矢作川をきれいにする会、三河湾環境再生プロジェクトなど、様々な環境保全と環境教育に関わる活動を積極的に行っている。東幡豆の“ミスター環境教育”と称しても過言ではない。



今
Present

穏やかに広がる東幡豆の海。多様なものを内包する東幡豆の海。多様な産業を育ててきた東幡豆の海。未来を育む東幡豆の海。

これまで見てきたように、今では一味違う姿を見せる東幡豆の海、東幡豆の町である。ここでは、東幡豆の海が育む地域資源について確認するとともに、東幡豆の海が育む可能性について述べ、この今昔紀行を締めくりたい。

●東幡豆の地域資源

東幡豆がかつての繁栄を享受できたことは、この町に豊かな地域資源が存在または潜在する証でもあると言えよう。それらの地域資源を天然資源・非天然資源という軸と、有形資源・無形資源という軸で整理してみたのが p.66 表 1 である。まず、「天然資源・有形資源」の категорияとして海や海岸、川、砂浜、磯などが挙げられ、中でもとくにトンボロ干潟、アサリ、マテガイが東幡豆を代表する地域資源として挙げられる。次に、「天然資源・無形資源」の categoriaとしては、トンボロ干潟の景観、潮干狩り以外にも、漁港・漁村の景観、干潟生態系、海洋生態系、磯観察、砂遊びなどが挙げられる。

また、「非天然資源・有形資源」の categoriaとして、魚介類せんべい等の東幡豆特産物、漁協市場、レストランの魚直²⁵、民宿の鈴喜館¹⁶と岡田屋¹⁷²⁷、幡豆石、幡豆石で建てられた堤防、矢穴石、石材埠頭、ローカル電車の名鉄蒲郡線、妙善寺²²、八幡宮等の社寺²⁰²¹、幡豆歴史民俗資料館等々が挙げられる。最後に、「非天然資源・無形資源」の categoriaとしては、東幡豆の民話・逸話、ストーンカップレース等の地元行事、漁師料理・郷土料理、角建網やアサリマンガ漁等の地域の漁業、アサリ種子の散布・干潟保全等の資源管理、資源管理組織やルール、底引網漁業体験、トンボロ干潟で行われる環境教育³³や大学実習³⁴、東海大学が毎年地元で開催するセミナー・報告会等々が挙げられる。

●東幡豆の可能性

このように、東幡豆には自然資源から文化資源にいたる多様に富む地域資源が存在していることが確認できた。言うまでもなく、今後はこれらの多様な地域資源を活

用しながら、漁村活性化・地域活性化を図ることである。ここでは、そのための視点を二つほど示しておきたい。

一つは、地域資源を価値創造するための新しいアイデア・発想である。全国的には、すでに地域活性化の事例として、6次産業化や海業の取組み、水産物ブランド化の取組み、ブルーツーリズムやエコツーリズム等のニューツーリズムの取組み等が見られている。これらを覗いてみると、実に様々な形を見せながらも、一つ共通するところを見つけることができる。すなわち、地域資源の価値創造である。地域資源の価値創造の方法としては、未利用資源の利用や資源利用方法の変更などが挙げられているが、東幡豆ではすでに地域資源の価値創造活動が見られている。例えば、トンボロ干潟を利用して環境教育を行うことは、トンボロ干潟を漁業資源の利用から教育資源の利用へと変更したことであり、立派な地域資源の価値創造になっているのである。今後もさらにこのようなアイデア・発想が求められよう。

もう一つは、これら地域資源の価値創造活動を実現するための担い手・人的資源の確保である。新しいアイデア・発想は持ちながらも、担い手・人的資源の欠如により、価値創造活動が実現されないケースも多々見られる。一つの方法として、多様な団体・機関との積極的な連携による「連携の経済性」を図ることが挙げられるが、東幡豆においては、このような連携活動についても確認することができる。p66 図 1 は、トンボロ干潟の環境教育活動における多様な団体・機関間の連携を示したものである。東幡豆漁協を中心に、愛知県、西尾市等行政の各部署、幡豆町農山漁村地域協議会漁活性化部会、幡豆地区干潟・藻場を保全する会、NPO 幡豆・三河湾ねっと、東海大学海洋学部など、地元と地元外における様々な団体・機関と連携体制が構築されているのである。今後もさらなる連携の強化・拡大により、東幡豆の地域資源を価値創造していくための「近道」を探ることが求められよう。 (李 銀姫)

旅日記
Vol.4

海も山も…
自然を満喫しました。
お土産も忘れずに。



幡豆歴史民俗資料館

昔の懐かしい生活用具がたくさん集められています。団平船や有名な鳥羽の火祭り等の模型展示も見応えあり！

三ヶ根山をドライブ

広葉樹が多い三ヶ根山は、土の養分が豊かです。東幡豆でおいしいアサリがとれるのも、雨とともに海に流れ出たこの養分のおかげでもあるんだとか。



三河湾が見渡せます



魚直でランチ

豆味噌を使った「豚肉の味噌焼き」は優しい味わい。旬の時期にはアサリやカキの味噌焼きも登場します。



中新本舗



東幡豆駅前にある昭和10年創業の老舗煎餅屋さん。手ごろな値段でとてもおいしいので、お土産に最適です。



海の幸を使ったおせんべい



おしまい

また来ようね！

・ 図表で見る東幡豆の地域資源と連携体制 ・

表 1 東幡豆における地域資源の概要

	有形資源	無形資源
天然資源	海、東浜海岸、森川、砂浜、トンボロ干潟、磯、アサリ・マテガイ等の水産物、海洋生物、藻場、海水、前島、沖島など。	漁港・漁村景観、トンボロ干潟景観、前島景観、沖島景観、漁船景観、干潟生態系、海洋生態系、磯観察、砂遊び、潮干狩り、釣りなど。
非天然資源	魚介類せんべい等の特産物、漁協市場、魚直、鈴喜館、岡田屋、中新本舗、幡豆石、幡豆石で建てられた堤防、矢穴石、漁港、港湾、漁村集落、石材埠頭、妙善寺、八幡宮、ローカル電車、歴史民俗資料館など。	民話・逸話、ストーンカッブレース、妙善寺かぼちゃしるこの振る舞い等の行事、漁師料理、郷土料理、角建網漁業・アサリ腰マンガ漁など地域ならではの漁法、アサリ種子の散布等資源管理、資源管理組織・ルール、底引網漁業体験、環境教育、大学実習、東海大学開催のセミナーなど。

出処：『H27 年度水産白書』、『地域資源の形成と価値創造』より作成。

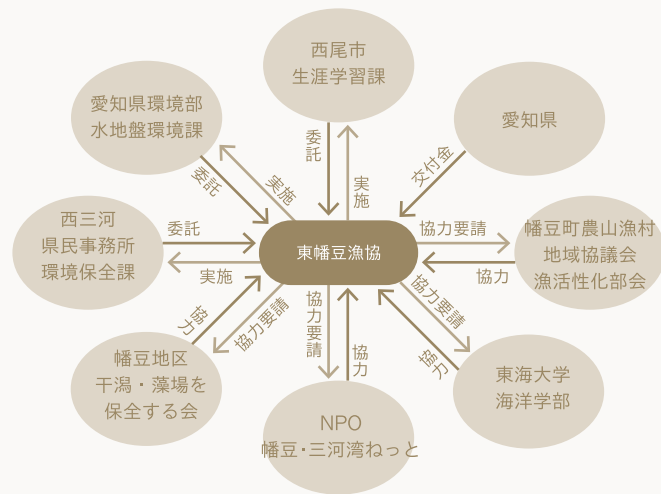


図 1 環境教育における東幡豆漁協と他団体・機関との連携体制

出処：「海洋教育における漁協の取り組みと機能をめぐって - 愛知県東幡豆漁協を事例に -」より引用。

Past and Present
in Higashihazu

今昔写真展「幡豆の海と人々」

2015年12月6日(日)に、東幡豆の海や自然の豊かさ大切さについて多くの人が集い語らう場づくりをねらいとした今昔写真展が、西尾市クリーンセンターにて開かれ、80名ほどの参加者が会場を訪れた。これは、東海大学海洋学部と総合地球環境学研究所のエリアケイパビリティプロジェクトが、2008年から東幡豆の海において進めてきた学際的研究の集大成として開かれた「三河湾市民セミナー」の一環として企画されたものである。



「三河湾市民セミナー」のチラシ



会場で東幡豆の海の昔と今について語らわれている様子や、地元住民と主催者との記念撮影の様子。



今にして思えば、日本の沿岸漁村地域の研究に興味を持つようになったのは、漁港漁場漁村技術研究所（現漁村総研）でアルバイトをしていた学生の頃である。当時、水産庁で進めていた「都市漁村交流事業」の学生支援団のメンバーとして、「浦島太郎の里」として知られる京都府伊根町の本庄浦というところへ派遣され、一週間ほど滞在しながら地元の活動を手伝う機会があった。

本庄浦は、丹後半島に立地し、資源状況の悪化から地域経済の活力が低下し続けてきた今日の典型的な日本の漁村であるが、疲弊した村の活力を呼び戻すことを目的に様々な努力をしていた。そのような頑張る地域で、親切と優しさだけでは表現しきれない地元の方々との1週間にわたる触れ合いによって、日本の地域が好きになったのかも知れない。「まだ何の力にもなれない自分ではあるが、いつか力になれる日を夢見てこれからの勉強と研究に励みたいと思う」と、活動後のレポートに綴ったことがまだ記憶に新しい。

そのような想いを、東幡豆という地域と付き合いながら抱いているこの頃である。研究調査のためにいろいろな地域を訪れているが、数年にわたって足を運んでいるのは東幡豆が初めてである。それこそ私の研究者人生の「はづ恋」の場所である。

本書を手掛けるようになって、思った以上の大変な作業に追われながらも、一方では、学術論文では伝えられない地域への「想い」をこのような形で伝えることができ、大変幸せな時間を持つことができた。今後も、ぜひ地域に「科学」と「想い」を伝える活動を続けていきたい。

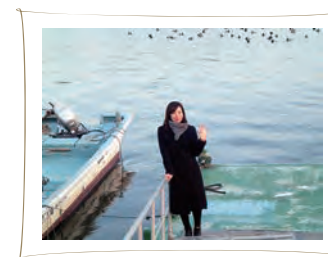
2017年3月 李銀姫

● 編者



李銀姫 Yinji Li (東海大学海洋学部・准教授)
1977年中国生まれ、博士(海洋科学)。海洋政策研究財団研究員、東海大学海洋学部講師を経て現在に至る。専門は沿岸域管理、地域経済。日中韓における沿岸漁業管理の仕組み、沿岸域の利用と管理の仕組み、漁村地域経済や活性化に関する研究を行っている。著書に、『幡豆の海と人びと』(総合地球環境学研究所、2016年、分担執筆)、『変わりゆく日本漁業—その可能性と持続性を求めて』(北斗書房、2014年、分担執筆)等

● 編集協力



本間咲来 Saki Honma
総合地球環境学研究所エリアケアバビリティープロジェクト研究推進支援員。
東幡豆には4、5回訪れており、少しずつこの地域がわかってきたところ。制作進行の面で編者をバックアップしました。



木村文子 Ayako Kimura
総合地球環境学研究所エリアケアバビリティープロジェクト事務補佐員。
新鮮な目で東幡豆を感じ、コラム下の旅日記を楽しみながら作成。「今」の写真もたくさん撮りました。

● 写真収集と聞き取り調査を手伝ってくれた東海大学海洋学部の学生たち



木下広夢 Hiromu Kinoshita (東京都出身)
地元への一言：
東幡豆の海や地域の方々と直接触れ合うことができ、貴重な経験ができました。
卒業研究テーマ：
今昔写真展「幡豆の海と人々」を通じた海洋環境意識の涵養に関する一考察



大芝颯太 Sota Oshiba (静岡県出身)
地元への一言：
美しい自然と親切な方々に囲まれた東幡豆で研究ができてよかったです。
卒業研究テーマ：
幡豆の海と人々の今昔比較研究(共同研究)



清水啓介 Keisuke Shimizu (神奈川県出身)
地元への一言：
親切に接していただきありがとうございました。また観光に行きます。
卒業研究テーマ：
幡豆の海と人々の今昔比較研究(共同研究)

豊かな海と人々のかかわり

千賀康弘（東海大学海洋学部・学部長）

静岡市清水区にキャンパスを持つ東海大学海洋学部は、目の前に駿河湾が広がり、三保松原の先に富士山を臨む美しい風景の中にあります。このように恵まれた環境の中で学んでいる学生たちが、先生に連れられて東幡豆の海に来て、駿河湾にはない、人々の生活と密着した豊かな海を感じるようです。

この写真集は、昔から東幡豆の豊かな海が、漁業や養殖業、海運業などの産業とともに人々の暮らしを支え、時代の変化を受け入れながらもその豊かさを引き継いできたことや、豊かな海と人々のかかわりなどについて教えてください。

個人的なことではありますが、私の生まれは幸田町です。祖母の実家は西浦で漁師をしていました。子どものころ（昭和30年代）、祖母の実家へ行くと、鍋いっぱいの茹でシャコが出てきました。実家には時々自転車の荷台にトコ箱を積んだ魚屋さんが来て、その中には牛の舌（シタピラメ）が跳ねていました。春先には近所の人があさを獲ってきて、よくお裾分けしてもらいました。当時はそれが三河湾の豊かさだと気づきませんでした。

これから先も、より多くの人々に東幡豆（三河湾）の海を知っていただき、この美しく豊かな海をいつまでも大切にしていきたいと願います。

「地域の知」と「学術の知」をつなぐランドスケープ（写真）

エリアケイパビリティプロジェクト・リーダー
石川智士（総合地球環境学研究所・教授）

2008年に幡豆の地を初めて訪れた時、浜辺で遊ぶ子どもたちの姿と美しい三河湾に魅せられて以来、この土地に通い学術調査を行ってきた。その成果報告会には、毎年多くの住民の皆さんが参加してくださり、情報の共有と次の研究課題の設定にご協力いただいていた。このような交流を通じて、「昔は、前島でヒジギがとれた」とか、「以前はノリが良くとれた」など、昔の様子も知ることができた。皆さん、本当に良く昔のことを覚えておられ、また、それらの情報は学術的にもとても重要なものである。

現在の自然の様子や生き物の在り様を調べている我々の心の中に、どうやったら地域住民の方々との交流とその語りを通じて、幡豆の昔の様子を知ることができるだろうかという気持ちや、何とかして、昔と今を比較して、地域社会の自然と暮らしのダイナミクスを表現してみたいという思いが芽生えてきた。おそらくこれが今回の写真集の出発点であったと思う。

写真集を作るにあたっては、単なる記録としてではなく、自然や社会、暮らしの変化をとらえつつ、幡豆に残る幡豆らしさや豊かさを表現するものであってほしいと願った。今回、それぞれ異なる視点と経験を持つ3名の女性が、共通に感じる豊かさと価値は、きっと普遍的な、また、だれもが共感できるランドスケープを私たちに届けてくれていると感じている。この写真集が、時代を超えて、地域を超えて、分野を超えて、様々な人の共感をはぐくむ種となってくれることを期待したい。

インタビュー：

「ふるさと」の未来のために

石川金男（東幡豆漁業協同組合・組合長）

●この写真集を見ていかがでしょうか？

まず感じたのは、昔の写真がよくここまで残っていたなあということです。つまり、当時、趣味として写真を撮る人がいたということですね。そういう人々のおかげで東幡豆の昔を知ることができる。思い出話的に見てもおもしろいですね。こう見ていくとやはり東幡豆の発展は幡豆石から始まったなと感じますね。

私は現在、環境教育など様々な活動をしています。やるのは大変だけれど、自分はよしとしてやっているのです。でも人に「やれ」とはいえない。ある意味趣味だからできるんです。写真と一緒にですね。思いが大事というか。この写真集を見ながらそんなことを思いました。

●未来に残していきたい東幡豆のよさはどこでしょうか？

それはやはり自然でしょう。東幡豆には自然しかありませんから。それに人間は自然に生かされていますからね。自然のなかでもとりわけ海の身近さは東幡豆ならではの気がします。

残念ながら、この地域の子どもたちは、生まれ育った場所の自然についてよく知りません。それに今の時代、海は遊ぶところというより、危険なところという認識のほうが強いのです。こうした意識を変えていかないとね。子どもたちには、自分の「ふるさと」に誇りを持ってもらいたいのです。

そのためには、私たち大人が自然に恵まれたこの地域のよさを彼らに教えていく必要がある。個人や小さな組織の活動だけでは限界がありますから、様々な機関や人々が連携し、地域の発展も見据えて協働していくことが大切だと思っています。

謝 辞

本冊子の出版にあたり、まず、写真の使用を許可して下さった西尾市教育委員会様、西尾市幡豆歴史民俗資料館館長の伴野義広様に深く御礼申し上げます。そして、地元における写真収集活動に多大なご協力をして下さった東幡豆区長の梅田伸宏様、元中日写真協会本部委員の福田千年様にも大変感謝いたします。さらに、東幡豆民宿鈴喜館様、東幡豆民宿岡田屋様、東幡豆魚直様をはじめとする地元住民の皆様には、多くの貴重な写真をご提供いただくとともに、ヒアリング調査にも大変ご親切にご対応いただきました。ありがとうございました。最後に、いつも東海大学海洋学部と総合地球環境研究所の研究教育活動に多大なご支援をくださる、石川金男組合長をはじめとする東幡豆漁業協同組合の皆様にも心より御礼申し上げます。

*本冊子は、東海大学海洋学部ならびに総合地球環境学研究所「東南アジア沿岸域におけるエアケイパビリティーの向上」プロジェクト（ACプロジェクト、No.14200061）の活動をもとに編まれたものである。

○参考・引用文献

- ・愛知県幡豆郡幡豆町、幡豆町報・広報はず、創刊号（S29）、第27号（S31）、第38号（S32）、第39号（S32）、第48号（S33）、第51号（S33）、第66号（S34）、第67号（S34）、第69号（S35）、第72号（S35）、第133号（S40）、第159号（S42）、第164号（S43）、第369号（S60）、第390号（S62）、第402号（S63）、第406号（S63）、第518号（H9）、第522号（H10）、第680号（H23）等。
- ・西尾市史編さん委員会、幡豆町史本文編3—近代・現代、2013年。
- ・幡豆町史編さん委員会、幡豆町史資料編3—近代・現代、2009年。
- ・石川智士・吉川尚編、幡豆の海と人びと、総合地球環境学研究所エアケイパビリティープロジェクト、2016年。
- ・石川智士・仁木将人・吉川尚編、幡豆の干潟探索ガイドブック、東海大学海洋学部 & 総合地球環境学研究所エアケイパビリティープロジェクト、2016年。
- ・李銀姫、海洋教育における漁協の取り組みと機能をめぐって—愛知県東幡豆漁協を事例に—、東海大学紀要海洋学部「海—自然と文化」第12巻第1号、p12-22、2014年。
- ・李銀姫、沿岸域管理における海域利用権利のあり方に関する日中比較研究、東京海洋大学博士学位論文、2008年。
- ・李銀姫、「由比桜えび」ブランド化戦略の実態と課題（第5章）、変わりゆく日本漁業—その可能性と持続性を求めて、北斗書房、p81-94、2014年、分担執筆。
- ・井野川伸男、愛知の水産史—ノリ養殖の沿革、愛知水試研報21、pp22-42、2016年。
- ・水産庁、H27年度水産白書、2016年。
- ・妻小波、地域資源の形成と価値創造、アクアネット、2005年。
- ・磯貝逸夫・鈴木悦道監修、西尾・幡豆いまむかし—写真集、名古屋郷土出版社、1989年。
- ・愛知県教育委員会、愛知県の近代和風建築総合調査報告書、2007年。
- ・愛知県農林水産部水産課、愛知県の水産業、2013年。
- ・西尾市・幡豆郡3町合併協議会、新市基本計画—自然と文化と人々がとけあい豊かに暮らせる町—、2010年。
- ・名古屋鉄道広報宣伝部編、『名古屋鉄道百年史』、名古屋鉄道、1994年。

○参考・引用ウェブサイト

- ・水産庁HP、水産物の流通・加工をめぐる動向、2016年2月にアクセス。
http://www.jfa.maff.go.jp/j/kikaku/wpaper/h25_h/trend/1/t1_2_3_3.html
- ・本井海苔株式会社HP、海苔の生産についての基本知識、2016年2月にアクセス。
<http://www.motoi-nori.co.jp/Noridistrict.html>
- ・ハズ観音・妙善寺HP、2016年2月にアクセス。
<http://www.hazu-kannon.net/>
- ・愛知県観光振興部観光局HP、観光レクリエーション利用者統計、2016年2月にアクセス。
<http://www.pref.aichi.jp/kanko/menu/toukei/recreation.html>
- ・愛知県HP、愛知県の漁業、2017年2月にアクセス。
<http://www.pref.aichi.jp/soshiki/suisan/O000003362.html>
- ・愛知県砕石工業組合HP、西三河支部組合員名簿、2017年2月にアクセス。
<http://www.aiweb.or.jp/saiseiki/html/nishimikawa.htm>
- ・愛知県陶磁美術館HP、基本理念、2017年2月にアクセス。
<https://www.pref.aichi.jp/touji/about/>
- ・西尾市観光協会HP、2017年3月にアクセス。
http://www.240kanko.com/?page_id=4382
- ・幡豆地域の情報発信サイト「やろまいネット幡豆」HP、小見行組の写真日記、2017年3月にアクセス。
<http://yaromai.dip.jp/sa-kuru/kokengyou/index.htm>



はぐく ひがしはす
育みの海 —東幡豆今昔紀行—

See What Sea Nurtures : The Past and Present Stories in Higashihazu

2017年3月31日 発行

2019年10月31日 2刷発行

編者 李銀姫
編集協力 本間咲来・木村文子

発行者 東海大学海洋学部
総合地球環境学研究所
「東南アジア沿岸域におけるエリアケイパビリティーの向上」プロジェクト

発行所 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
総合地球環境学研究所
〒603-8047 京都市北区上賀茂本山 457 番地 4